

## 酒田湊と北前船—土地・もの・人の縁—

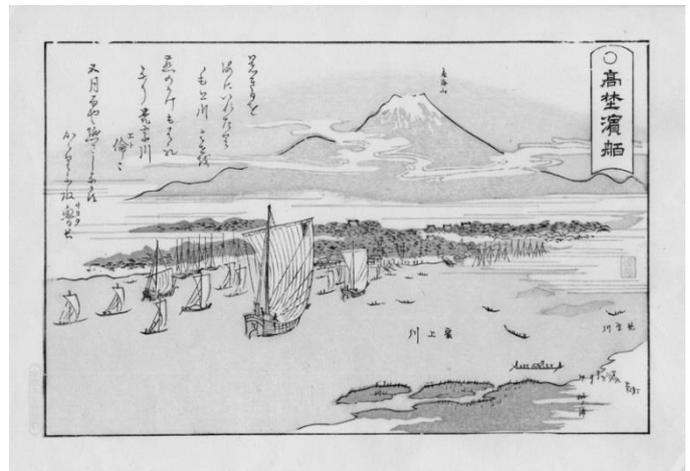
開催期間 令和元年9月7日～11月18日

### 開催にあたって

寛文12年(1672)、幕府の命を受けた河村瑞賢が、最上川流域の御城米(幕府領米)を酒田から江戸に輸送するための西廻り航路を整備しました。この航路によりひとつにつながった日本海を舞台に、江戸中期から明治半ばまで繰り広げられていたのが、蝦夷地(北海道)と西国を結んだ北前船交易です。

海上物流の拠点としてにぎわった酒田湊には、全国各地の産物を積んだ船が集まり、最上川舟運によって内陸から運ばれた紅花や青苧などの名産品が送り出されました。江戸時代に出された全国の湊の番付では、西の前頭二枚目に選ばれています。

本企画展では、庄内はもとより県内外の多くの方々にご協力いただき、酒田の商人が各地の商人と交わした取引証文、各地の船乗りが酒田の寺社に奉納した船絵馬など、北前船がつかないさまざまな「縁」を伝える資料を展示します。日和山の常夜灯や方角石など、往時の繁栄ぶりを伝える遺物も紹介します。



木版酒田十景「高野浜大船」

文久年間(1861～64)に、本町一丁目の五十嵐仁左衛門が、五十嵐雲嶺に酒田の名所を描かせて、お土産として売り出した版画。

## 酒田を起点に整備された西廻り航路

### 河村瑞賢による西廻り航路の整備

寛文12年(1672)、幕府の命令を受けた河村瑞賢(※)は、最上川流域の天領(幕府領)で取れた御城米を、酒田から江戸へ運ぶ「西廻り航路」を整備した。

それまで御城米の輸送は、敦賀→琵琶湖→伊勢桑名を經由して江戸まで運ぶルートをとっていた。水上輸送と陸送を繰り返すこの輸送方法では、何度も積み替えをしなければならず、日数がかかるうえに、米に傷みが生じていた。費用もかさみ、米の値段にも影響していた。

この頃、江戸の町では人口が膨れ上がり、米の需要が増大していた。たびたび大火が発生し、財政が苦しくなっていた幕府は、主食であり、重要な財源である御城米を、早く安全に江戸に運ぶ必要に迫られていたのだ。

この年の5月2日に酒田を出帆した御城米船は、7月、無事に江戸に到着した。酒田と江戸を直接、安全につないだ西廻り航路は、庄内藩と内陸諸藩の米である「御蔵米」の輸送にも使われ、やがて北前船でにぎわう物流の大動脈になっていく。

※河村瑞賢(かわむらざいけん)

元和4年(1618)、伊勢国度会郡(現在の三重県南伊勢町)の貧農の家に生まれる。江戸に商売を始め、明暦3年(1657)の江戸の大火後、木曾に赴いて材木を買い占めて富を得る。その商才を見込んだ幕府の命により、寛文11年(1671)、陸奥の御領米を江戸に送る東廻り航路を整備し、翌年には西廻り航路を整備した。その後、土木事業や鉱山事業に携わる。元禄12年(1699)没。



日和山公園にある河村瑞賢像

## 河村瑞賢がとった廻米方策

### (1) 回漕船について

- ・民間の船を雇い、幕府の幟(日の丸)を立てる。
- ・北国海運に慣れた讃岐の塩飽島、備前の日比浦、摂津の伝法・河辺・脇浜などの船を雇う(瑞賢は、特に堅牢な塩飽島の船を推している)。

### (2) 運賃と酒田での米の保管について

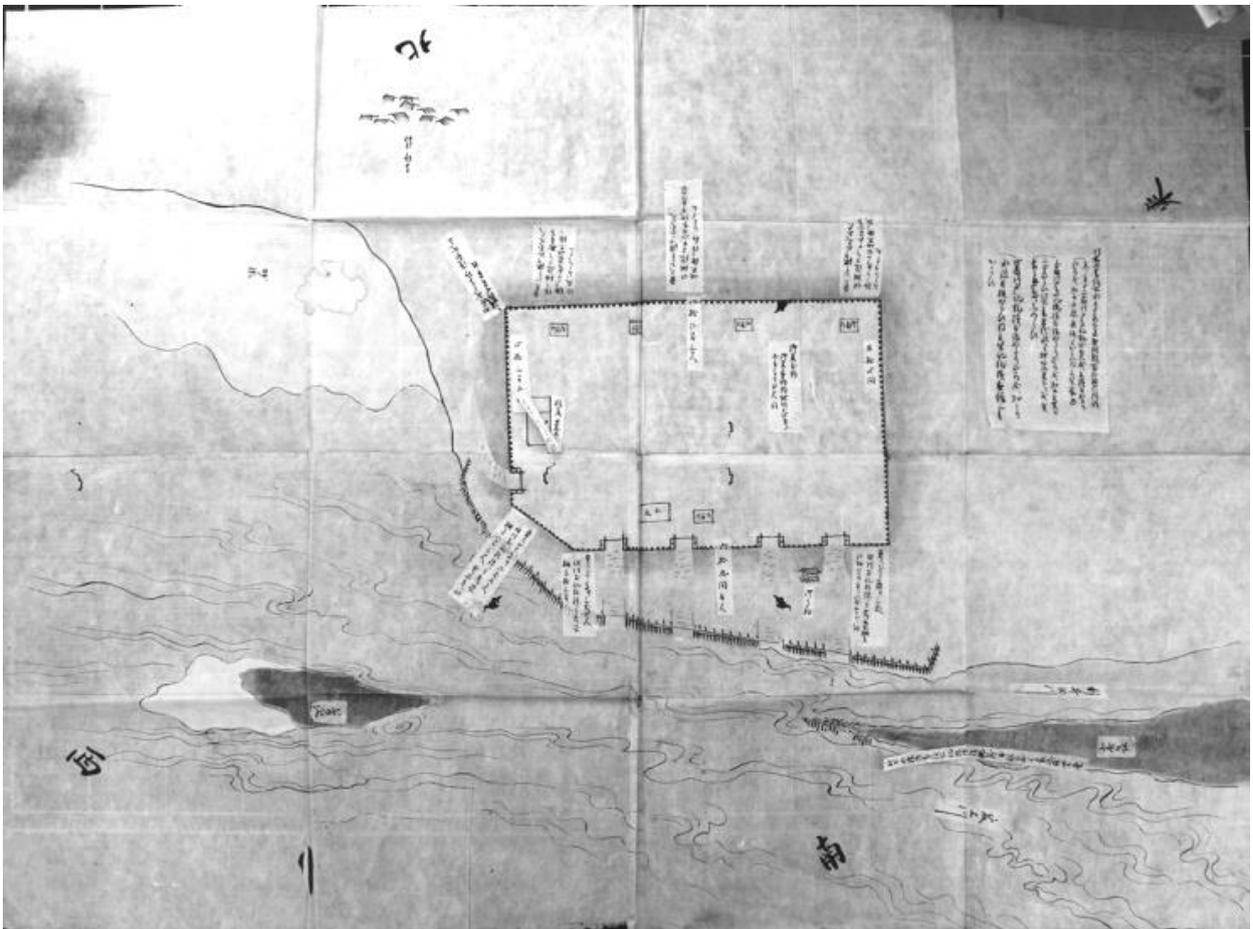
- ・最上川の川舟の運賃、舢舨で廻船に米を積み込むまでの費用を幕府が負担する。
- ・倉庫使用料の削減と火災からの保護のため、酒田の海岸に専用の米倉を設ける。

### (3) 安全対策について

- ・寄港地の入港税を免除させる。
- ・岩礁で危険な長門下関湊には水先案内船を備える。
- ・志摩鳥羽湊口の青島には、毎夜のろしを上げる。

### (4) 寄港地について

- ・寄港地を①佐渡の小木②能登の福浦③但馬の柴山④石見の温泉津⑤下関⑥大坂⑦紀伊の大島⑧伊勢の万座⑨志摩の安乗(畔乗とも書く)⑩伊豆(静岡県)の下田とする。
- ・寄港地には番所を設けて手代を置き、沿道の諸侯、幕府代官にも船の保護に当たらせる。



御米置場絵図

瑞賢は西廻り航路の整備にあたり、日和山下、標高15メートルの高台に、俗に「瑞賢庫(ずいけんぐら)」と呼ばれる御城米専用の御米置場を設けた。広さは東西150メートル、南北82メートル。周囲に柵木を立てた土塁を築き、その外側に堀を造った。川舟から陸揚げされた御城米を運び入れるため、湊(最上川)に面して尾花沢門、漆山門、柴橋門、寒河江門、大山門の5つの門を設けている。

工事には庄内藩があたり、酒田と郷村から延べ3万398人の人足が集められ、約1カ月で完成させた。

米置場には蔵はなく、米は土間に野積みし、雨で濡れないようにカヤやワラで編んだ簀や蓑のようなもので覆ったといわれる。計算上はおよそ7万2,000俵を積み上げることができた。



瑞賢庫跡の石碑

日和山公園駐車場内にある石碑。上から見ると米の字になっている。



日の丸船印（御城米通船幟）

西廻り航路が整備された翌年の寛文13年（1673）、幕府は御城米を江戸や大坂に運ぶ廻船に、日の丸（朱の丸）を付けた幟を立てるよう取り決めた。「御城米」の文字も記されているこの幟は、酒田市内の旧家が所有し、酒田から西廻り航路で御城米を運んだ船で使われたものと考えられる。

幕府領米積出船の日数—天保6年（1835）—

船主	乗組員	大坂出	酒田着	酒田出	赤間関着	品川着
1. 大坂 江戸屋正三郎	19人	3/14	4/9	5/5	5/10	6/7
2. 大坂 木津屋平兵衛	20	2/29	3/晦	4/26	5/8	6/18
3. 大坂 金芳屋作助	19	2/25	4/9	5/9	6/2	6/23
4. 大坂 江戸屋正三郎	18	2/28	4/13	5/19	6/5	6/25
5. 芸州 因ノ島政蔵	19	3/8	6/1	6/16	7/6	8/1
6. 摂州 御影徳蔵	22	2/28	4/23	6/15	7/5	8/晦

※赤間関…下関の古称

『酒田市史 改訂版』上巻より

## 北前船交易の時代へ

### 北前船の登場と発展

「北前船」とはどんな船か。一般的なイメージは、ここに展示している船ではないだろうか。しかし、北前船は船の形を表す言葉ではない。この形の船は「弁才船」という。

では北前船とは何だったのか？研究者によって見解はやや異なるが、大坂(大阪)と蝦夷地(北海道)を日本海廻りで行き来して、寄港地で積荷を売買した船といえるようだ。

北前船最大の商品といえば、ニシンやコンブなどの北海道の海産物だが、北前船が登場するまでは、戦国時代末期から松前に進出していた近江商人が一手に取り扱っていた。当時は、酒田から積み出された御城米と同じように、敦賀から琵琶湖を經由して大坂に運ばれていた。

多くの近江商人は、北陸の船乗りなどを雇っていたが、18世紀中ごろになると、近江商人から独立して、蝦夷地や大阪の商人と直接取り引きする船乗りが現れる。これが北前船である。背景には、日本海をひとつにつなぐ西廻り航路が整備されていたこともある。

その後、寛政11年(1799)に幕府が東蝦夷地を直轄領とし、箱館経由の商品流通の拡大に取り組みと、北前船交易はいよいよ盛んになり、酒田湊のにぎわいも増していく。

### 弁才船「万福丸」模型→

山大附属博物館には、研究者の石井謙治氏らの手による「万福丸十歩一之図」の復元図が所蔵されている。それを基に、旧温海町の船大工・佐藤磯蔵氏(故人)が万福丸の設計に関するデータを算出し、16分の1大で製作した。



←佐渡小木製の船箆筥(懸硯)／江戸後期

懸硯は、代表的な北前船の船箆筥。往来手形や船の鑑札、積荷に関する送り状、売買仕切帳などの書類、現金などを入れた。酒田は佐渡小木、越前三国とともに、船箆筥の三大産地に数えられた。中でも最大の産地が小木だった。

## 北から西へ運ばれたもの

### 酒田から積み出された山形の特産品、蝦夷地最大の商品となったニシン

酒田が米の集積地になり最上川舟運が発達すると、米だけでなく紅花や青葙などの内陸地方の特産品も、酒田から上方へ送られた。

また蝦夷地からは、塩鮭やニシン、コンブなどの海産物が運ばれたが、瀬戸内海方面で藍や綿花、イグサなどの栽培が盛んになるにつれて、その肥料としてニシン粕の需要が拡大する。

ニシンは、稲が育たない蝦夷地に置かれていた松前藩にとって、「魚に非ず、米なり」という意味を込めて、「鯡」という漢字をつくるほどのドル箱商品になった。明治時代になると、小樽祝津に移住した青山留吉など、庄内から北海道に渡り、ニシン漁で成功を収める人も登場した。

## 手広い商売をした廻船問屋・尾関家

江戸中期の酒田を代表する廻船問屋のひとつだった尾関家。先祖は、寛永(1623~44)の頃、尾州鳴門(愛知県名古屋市の)から酒田に移り住み、はじめは上中町で油屋を営んだ。その後、本町に屋敷を構えて廻船問屋として成長し、酒田の町政・経済を担った「三十六人衆」のひとりになった。

本間家の信用を得て、同家の資本で金融業も行い、米沢藩や新庄藩の蔵宿を勤めるなど、多方面で活躍した。

### 尾関家の取引先 (山形県外)

	国(地域)	件数		国(地域)	件数		国(地域)	件数
1	仙台	6	19	越中	4	37	若狭本郷	2
2	箱館・松前	4	20	越中高岡	12	38	若狭	4
3	津軽	1	21	越中伏木	4	39	近江	3
4	秋田(湊)	4	22	越中岩動	1	40	近江位田	2
5	秋田亀田	3	23	加賀安宅	4	41	但馬瀬戸	4
6	秋田本荘	3	24	加賀橋立	1	42	但馬豊岡	2
7	秋田矢島	5	25	加賀宮越	5	43	但馬	3
8	秋田仙北	2	26	能登輪島	2	44	丹後伊松	4
9	秋田象潟	1	27	能登福浦	1	45	丹後由良	14
10	庄内加茂	6	28	能登出村	1	46	丹後岩滝	14
11	越後新潟	7	29	能登所口	1	47	丹後宮津	6
12	越後直江津	1	30	能登口波	1	48	丹後	7
13	越後高岡	1	31	越前三国	3	49	京都	5
14	越後早川	1	32	越前敦賀	14	50	伯耆(ほうき)	2
15	越後青海浦	1	33	若狭西津	4	51	出雲	5
16	佐渡宿根木	4	34	若狭小浜	7	52	隠岐	1
17	佐渡新保村	1	35	若狭早瀬	4	53	大坂	2
18	佐渡小木	2	36	若狭宮津	2	54	和泉	5

小野寺雅昭氏調査資料を基に作成

## ニシン漁で財をなした青山留吉

青山留吉は、天保7年(1836)に遊佐青塚村の貧しい漁師の家の六男として生まれた。向学心が強く、子どものころから母の行商を手伝い、15歳になると父の仕事を手伝い、漁の技術を身に付ける。

18歳で由利郡塩越村(にかほ市象潟)の旧家の養子になるが、家風になじまず実家に戻り、安政6年(1859)、ひとりで蝦夷地に渡り、祝津(小樽市)で雇漁夫として働いた。

ニシン漁に打ち込む決意をした留吉は、翌年には小規模ながら漁場を開き、明治元年(1868)に移住。祝津を中心に漁場を拡大し、漁場15ヶ統、漁船130隻、使用人300人余を有する北海道有数の大漁業者に成長した。

その後、73歳で養子の政吉に漁場を譲ると生まれ故郷の青塚に隠居した。大正5年(1916)没。

祝津の網元には、青山家のほかに、留吉と同じ遊佐出身の茨木與八郎が興した茨木家、酒田内匠町の本間久平の長男・永作が養子となった白鳥家があり、祝津の御三家と呼ばれた。



青山留吉 (遊佐町教育委員会提供)

## 酒田から蝦夷地に大量輸出された「マキリ」

マキリはアイヌの人たちが使っていた脇差の名称。林子平著『三国通覧図説』には、すべて酒田鍛冶町の鍛冶職人が打ったものであると書かれている。

北海道ではニシンを加工するのにもマキリを使ったといい、北前船交易が全盛だった時代、大量のマキリが酒田から蝦夷地に輸出されていたことがうかがえる。

林子平著『三国通覧図説』  
天明5年(1785)  
国立国会図書館蔵



## 西から北へ運ばれたもの

### 西国から酒田にもたらされた品物と文化

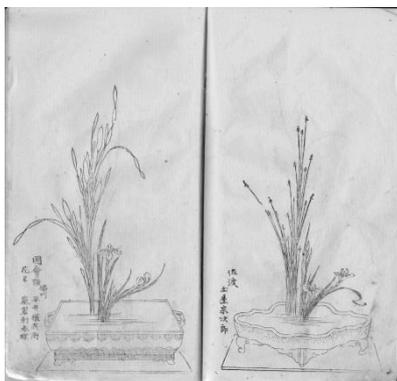
船主自身が商品を、各地の湊で売り買いする「買い積み方式」で利益を得ていたことから「動く総合商社」ともいわれている北前船。酒田湊から米や最上川流域の産物を上方へ送り出した船は、塩や木綿、茶、古手(古着)、その他さまざまな日用品を運んできた。

北前船は、各地の文化をつなぐ役割も果たし、酒田には多くの上方文化がもたらされた。財をなした豪商たちは、教養のひとつとして華道や生け花をたしなみ、商人に勤勉努力の大切さを説いた石田梅岩の「心学」を心の支えにしたといわれている。

酒田では毎年、春の風物詩として「酒田雛街道」が開催されているが、旧家などに大切に伝えられてきた古い雛人形も北前船で運ばれてきたもので、往時の湊町文化を象徴している。



京都製の古今雛／江戸期～明治期  
木箱とともに当館に寄贈された。



『生花新選 百花式』／江戸期  
京都で生まれた日本最古の華道家元・池坊の生花図集。

酒田華道の源流は、正保4年(1647)に雲照寺・橘玄周が池坊家元専好から皆伝を受けて酒田会頭職になって、指導に当たっている。

### 京都から日本海を渡ってきた木箱→

酒田の旧家から当館に寄贈された雛人形が収納されている木箱。「渡海安全」 「京六角堂前 筑前屋 治郎左衛門」の墨書きがあり、京都から酒田へ荷物を運ぶのに使われたことが分かる。





### 京被衣(きょうかつぎ)

女性が外出時に顔を隠すためにかぶった単衣の小袖。平安時代から身分の高い女性が用いていたが、江戸時代になると庶民にも広がった。

酒田には古手(古着)が大量に運び込まれ、上方の服飾文化が伝えられた。なかでも京被衣は需要が高かった。この被衣の紫色は、藍で染めた後に紅花で染めて出している。

やがて、供給が間に合わなくなったため、地元でも被衣を作るようになり、「庄内被衣」と呼ばれた。

### 酒田の旧家から掘り出された伊万里焼の破片→

有田(佐賀県)を中心に生産された伊万里焼は、北前船交易の発展とともに全国に広まり、酒田にも数多く運ばれている。この破片は、本町通りにある旧家の土地から掘り出された。



### 薬種・雑貨を商った西田家

西田家は近江商人で、貞享元年(1684)に初代・井田半次郎が酒田湊に薬を運び、本町の空き地に仮店舗を構えたのが始まり。2代目までは、春から秋まで酒田にいて、冬は近江に帰っていたが、3代目半次郎の頃から「西田」を名乗り、本町に定住した。

大坂道修町の伏見屋吉兵衛などから薬種を仕入れた際の送り状などが、酒田市立光丘文庫に残っている。



西田家前から本町通りを撮った写真/明治38年(1905)

写真の技術が日本に導入されると、西田家では写真用の薬品を取り扱った。当主自身も写真を撮っている。その中の1枚で、屋号である「井筒屋」の看板が写っている。通りの奥には日露戦争の勝利を祝う凱旋門が見える。(この写真は展示していません)

### 西田家が大坂から仕入れた商品

#### ①薬種

黄連、人参、陳皮、桃皮、香附子、柴胡、白蜜灰墨、辛灰など

#### ②雑貨・日用品

蛤貝、油扇子、丸線香、砥の粉、奉書、若狭紙、小梅干、植木、千本棹、葉ほうき、池田炭、竹枝、茶など

(小野寺雅昭氏調べ)

### 三田尻から仕入れた塩でもうけた中村太助

中村太助は天保9年(1838)、船場町で生まれた。本間家下倉で米の取引に従事していた父親の跡を継いだが、明治2年(1869)に独立し、中町で塩の販売を始める。

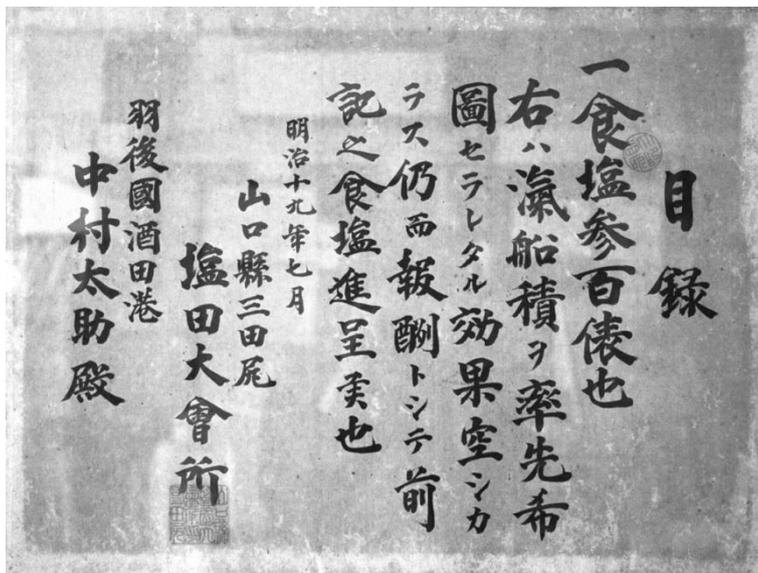
北前船の代表的な商品のひとつでもあった塩。当時は瀬戸内海各地から木造帆船で輸送していたが、太助は明治4年(1871)、周防三田尻(山口県防府市)の塩を、鉄船を使って酒田まで大量輸送することに成功する。

仕入れた塩は、最上川を上って内陸一円で売りさばき、大きな利益を得た。この功績が認められ、明治19年(1886)、三田尻塩田大会所から食塩300俵の報酬を受けている。

その傍ら、庄内で初めて荷車を制作し、明治18年(1885)には中村鉄工所を設立。両羽橋の建設にも使われた水中穿孔機、石油発動機を開発するなど、発明家としても才能を発揮。町会議員、商業会議所常議員なども務めている。明治40年(1907)没。

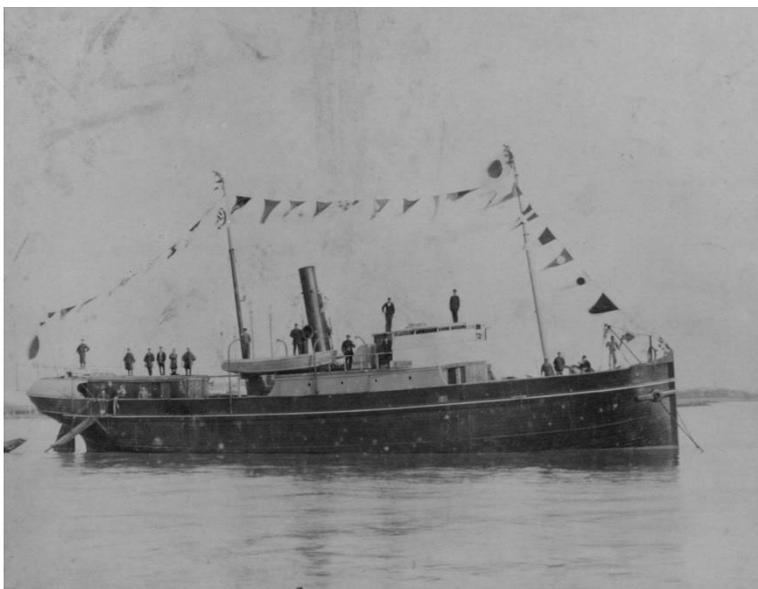


中村太助(向かって右)。太助が開発した水中穿孔機が写っている。



三田尻塩田大会所が中村太助に贈った食塩の目録  
明治19年(1886)

三田尻塩田大会所の『諸事書留帳』には、「秋田県(山形の間違い)酒田湊塩商中村太助より、同店支配人中村常三郎を以て汽船積塩取引之儀に付来浜致すにより…(後略)」と記述がある。常三郎は太吉の三男。



中村太助が三田尻から塩を輸送した鉄船

## 船絵馬が伝える縁

### 船乗りたちが願いをこめて奉納した船絵馬

「板子一枚下は地獄」という言葉があるように、天候にその命を左右されていた船乗りたちは、常日頃から神仏に祈り、神社仏閣にさまざまな寄進、奉納を行った。船絵馬もそのひとつだった。

現存する最も古い船絵馬は寛永年間(1624～43)のもので、この頃は幕府の許可を得て東南アジアとの交易を行っていた豪商が奉納していた。それが北前船交易の発展とともに一般化し、最も盛んだったのは天保期(1830～44)から明治30年頃までだった。

酒田の寺社にも、たくさんの船絵馬が奉納され、昭和60年(1985)に山形県立博物館が発行した『山形県の絵馬—所在目録—』によると、47点の船絵馬が確認されている。その多くは、明治時代に地元の漁師が奉納したもの。江戸時代、繰り返し火事に見舞われたことも理由なのか、港に近い旧市内にはほとんど残っていない。

しかし、船絵馬奉納の慣習が酒田に根付いていたことは確かである。少ないながらも他の湊の船乗りが奉納した船絵馬も残っており、北前船寄港地としての酒田の歴史を垣間見ることができる。

### 大坂で量産された船絵馬

19世紀のはじめ、北前船最大の寄港地・大坂(大阪)に船絵馬を制作する船絵馬師が登場した。はじめから船絵馬専門の絵師がいたわけではなく、一般的な絵馬を描いていた絵師の中から、船絵馬の需要拡大にこたえて船絵馬師と名乗る人が現れたと考えられている。

江戸時代に大勢を占めていたのは、吉本善京の吉本派、杉本清舟の杉本派の2流派。杉本派が手描きにこだわったのに対し、吉本派は手間のかかる船体部分を版画にする手法を取り入れ、量産を可能にした。これによって、廻船問屋や船主だけでなく、収入の少ない船乗りたちも船絵馬を安く購入できるようになり、船絵馬奉納の一般化が進んだ。

明治時代、吉本派に代わって人気を集めたのが絵馬藤(籐)。酒田の神社にも絵馬藤派の作と思われる絵馬が、何枚も奉納されている。



船絵馬「外川丸」

奉納年月日 嘉永2年(1849)4月、奉納者 志満屋助三郎

日吉町の稲荷神社に奉納された船絵馬。大坂の船絵馬師・吉本善京の落款がある。志満屋は酒田にあった廻船問屋で、惣問屋名目録帳(酒田市立光丘文庫蔵)に名前がある。

## 今も残る北前船の記憶

### 日本遺産に認定された北前船のストーリー

平成29年4月、酒田市を含む7道県11市町の北前船寄港地をつなぐストーリー「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」が、日本遺産に認定された。

昨年5月には14道府県27市町村が、今年5月には、酒田に次ぐ湊として栄えた加茂がある鶴岡市を含む、4県7市町村が追加認定され、認定自治体の数は16道府県45市町になっている。

酒田では、日和山公園や旧鑑屋、本間家旧本邸のほか、茶屋文化を伝える山王くらぶ、相馬屋主屋などが、北前船時代の酒田の魅力を伝える構成文化財になっている。

江戸時代のたび重なる火事、昭和51年(1976)の酒田大火などにより、失われてしまったものも多いが、日和山を中心とした酒田港周辺を歩くと、そこそこで北前船時代の面影を残す風景に出会える。



出羽一宮鳥海山坂田浦眺望図 紀豊古筆／江戸後期

鳥海山を背景にした酒田の町並、川舟が行き交い、弁才船と思われる帆船が停泊する湊が描かれている。北前船でにぎわっていた時代の酒田の様子がうかがえる。



日和山公園展望台にある方角石／年代不明

干支を組み合わせて方角を示したもの。常夜灯とともに酒田湊のシンボルとして親しまれてきた。設置された時期は不明だが、寛政6年(1794)、米沢藩の財政再建のため、上杉鷹山の命を受けて本間光丘を訪ねてきた米沢藩家老・荻戸善政が記した『酒田往復記録』に、方角石の絵が描かれている。



日和山公園にある常夜灯

文化10年(1813)、紀州日方浦(和歌山県海南市)の船頭・橋本源助、羽州加茂湊の長沢清吉、酒田の網干屋与左衛門の3人が世話人となって、日和山(現在の日和山公園展望台)に建てた。燈屋惣右衛門などの酒田の廻船問屋や、酒田湊に出入りしていた西廻り航路諸湊の廻船問屋の名前が、ずらりと刻まれている。



笏谷石を敷いた神明坂

船場町の船着場から皇大神社をつなぐ階段。船のバランスをとるための重りとして使われ、北前船で酒田まで運ばれてきた笏谷石(福井県産)が使われている。日和山の常夜灯と同じ文化10年(1813)に、本間家4代・光道が私費で建設した。



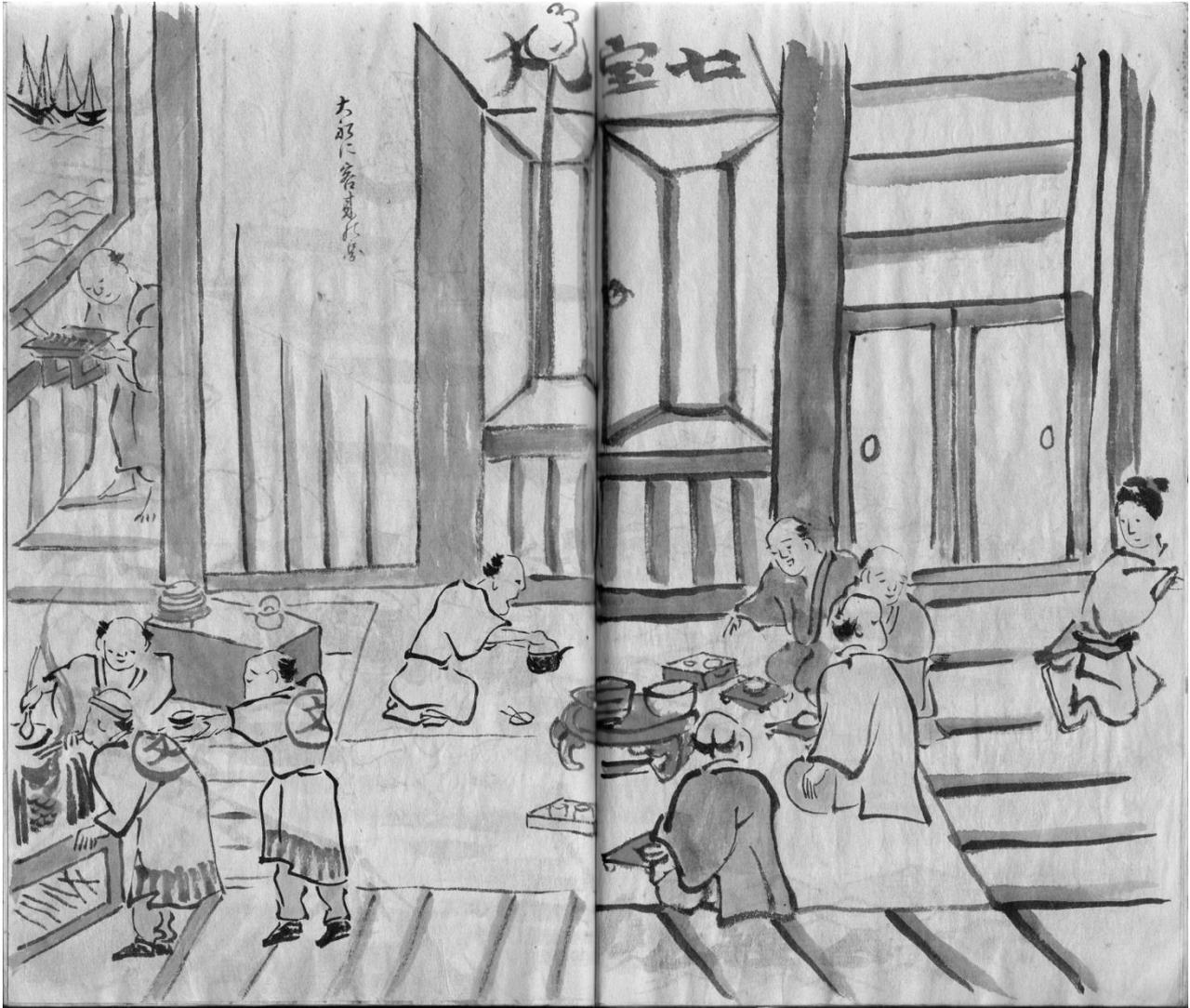
皇大神社

船着場から日和山に上る場所にあり、諸国の船乗りなどでにぎわった。航海の安全を守る金毘羅大権現を合祀し、石畳、石鳥居、石灯笼、狛犬、碇、絵馬など、酒田港の繁栄を伝える奉納品が多く残っている。「神明さん」の愛称で市民に親しまれている。



天正寺の船形千手観音

酒田市相生町の天正寺にまつられた三十三観音の中の一体。台座が船、光背が帆をかたどっている。光背に「明德丸 石見 油屋未代吉」と刻まれ、航海安全を祈ったか、遭難者の供養のために奉納したものと思われる。



『飛島図絵』大船に客来の図(写)／天保11年(1840)

島役人として飛島に赴任した佐藤梅雨が、飛島の自然や風俗を描いた飛島図絵(飛島図画とも)の複写本。その中に、北前船らしき船で客をもてなしている図がある。

飛島は北前船の風待ち港であったが、一時碇泊湊として多くの船が行き来していた。津国屋の号を持つ本間又右衛門家は、宝暦年間(1751~64)には新庄藩の御用を勤めるほど栄えている。

### 10数軒の廻船問屋があった加茂

三方を山に囲まれた天然の良港である加茂は、江戸時代初頭から酒田に次ぐ湊の役割を果たし、小規模ながらも北前船の中継地として発展した。取引先は、北は江差、松前から南は越後までの沿岸を主として、200石以下の小さな廻船を使った交易が中心だったらしい。

廻船問屋が10数軒、附船問屋(船宿)も10数軒あり、出入りする船の世話を当たった。代表的な廻船問屋には秋野家、大屋家、長沢家などがあつた。湊周辺の街並みには当時の面影が今も残っている。



加茂港／明治~大正頃



羽州庄内領加茂浦  
 秋野興與四郎船沖船頭多作  
 水主共五人乗相改申候条  
 津々浦々無相違御通  
 可被成候以

船手形／天保9年(1838)  
 加茂・秋野興與四郎の持ち船の船手形



引札「酒田港今町 新谷又四郎」／明治期

引札は、商店の開店や商品の宣伝のために配った広告。今町の北側角にあった新谷商店のもので、清酒、ビール、煙草などを取り扱っていることが分かる。

引き札が語る人の縁

この引き札は、当館が今年収蔵した資料。新谷家について、現在の当主に伺ったところ、元々は船場町で廻船問屋を営んでいたことや、この引き札が作られた頃の又四郎は4代目で、京都丹後の船乗りだった人が新谷家の娘・竹乃と結婚して跡を継いだことが分かった。

さらに4代目又四郎について詳しく調べていただき、安政6年(1859)、北前船の寄港地だった竹野(兵庫県豊岡市)と隣り合う漁村・瀬戸村(同市)で古田吉右衛門の四男として生まれ、明治9年(1876)に酒田今町の五十嵐権吉の長男・吉太郎として養子に入り、その後、竹乃と結婚し、又四郎の名を継いだことも分かった。

古田吉右衛門は「日吉丸」という120石積みの廻船を持つ船主で、直乗船頭として自ら船に乗っていた(『港町史』より)。丹後は瀬戸村からほど近く、北前船で栄えた久美浜がある港町。四男だった吉太郎(又四郎)は、独立して丹後で北前船の船乗りになり、寄港先の酒田で見染められて養子になったのかもしれない。

